

## 【書評論文】

### アナキー下のアクター間の協力の困難と可能性

Masatsugu Matsuo. *Peace and Conflict Studies: A Theoretical Introduction*. Hiroshima, Japan: Keisuisha, 2005.

徳光祐二郎

(広島大学国際協力研究科博士課程後期)

#### はじめに

本書は、広島大学大学院国際協力研究科において著者が担当した講義「平和学」の内容の一部を土台としてまとめられたものである (Matsuo 2005, preface)。著者の意図には、一つに本書が大学院レベルでのイントロダクションとして役立つことがある。他方で、本書は著者の長年の「平和学」研究の一部が反映されたものでもある。著者の他の一つの意図として、これまでの平和学、特にその理論的な側面を批判的に検討した結果を反映させ、それを通じて本書が平和学に貢献することがあり、ここに本書の特長の一つを見出すことができる。

平和学の内容は広範に及ぶ。その中でも、全体にわたって特に焦点が当てられたのは戦争と武力紛争であった (Ibid)。それは本書の構成からも明らかであり、第三章「戦争と対立の研究」、第四章「大戦の研究」、第五章「軍備競争」、第六章「内戦」、第七章「国際社会における対立と協調」においては戦争と武力紛争が中心的に議論された。これらを挟む第一章「平和とは何か？」(導入)や第二章「平和学の展開」(平和学の歴史的展開を整理)や最終章「理論に関する追記：平和学はどこへ向かうのか？」(今後の平和学の展望を議論)も、本書において焦点とされる戦争と武力紛争に関する要点を浮き立たせるものと理解できる。ならば、著者はなぜ戦争と武力紛争に焦点をあて、そこから平和学を議論しようとするのか。まずはこの疑問を検討して、本書評論文が特に注目する

第7章に関する議論に進みたい。

戦争と武力紛争に焦点があてられた理由は、第一に戦争と武力紛争に関する先行研究が現実問題として不十分であり、さらなる研究の必要があるからと考えられよう。例えば、著者は第四章において大戦と他の種の戦争（局地紛争など）との関係の理論的研究が不十分であることを指摘している（Ibid、76）。また、大戦や他の戦争を最終的には予防あるいは撲滅することを目的としてそのような戦争の性格や原因を研究する場合、体系的なかたちで、その理論的研究のためのより広範な理論的枠組みが必要とされていることも指摘する（Ibid）。このような不十分や必要に対応するために著者は戦争と武力紛争に焦点を当てたものとまず考えることができる。

第二に、戦争と武力紛争に焦点をあてた研究に価値（あるいは意義）があると考えからである。著者は、「戦争がもたらす膨大な人・モノのコストや犠牲を忘れてはならない」と言う（Ibid）。平和学は、戦争のコスト、犠牲、破壊的な結果ゆえに主として戦争を撲滅しようとするものであり、もし戦争が個人、家族、集団やコミュニティー、社会、国家にコストや犠牲を伴うものでないならば、戦争はあまり研究の価値がないと指摘する（Ibid）。逆に言えば、これは戦争と武力紛争がコストや犠牲や破壊的な結果をもたらしている実際があるからこそ、その撲滅を意図した戦争と武力紛争の研究は価値（あるいは意義）があるとの見方の表れと捉えることもできよう。

第三に、これまでの平和学に対する批判的検討に関わる議論を強調する上で、これが有効な手法だからである。例えば、本書では「プロセス・ユートピア」が平和学にとって重要な考え方として紹介される。つまり、平和学の重要課題が現在から最終的に到達する未来の目標（望ましい未来像）までの手段と方法について考えることにあるとすれば、それは現在と望ましい未来像とを確かに結ぶ直線上に位置づけられる「プロセス・ユートピア」が重要であるという見方である（Ibid、6-7）。しかし著者は、「プロセス・ユートピア」は、ジレンマや難点（drawbacks）を伴う考え方であり（Ibid）、たとえば近年の核軍縮プロセスは、この「プロセス・ユートピア」のジレンマに陥っていると指摘する（Ibid、102-103）。このジレンマとは、実現可能性に重点を置きすぎた段階的なプロセスが、中間目標（及びその達成のための諸取組みや諸手続き）をあ

まりに多く介在することとなり、これより最終的な目標（つまり核廃絶）の達成が先延ばしになる、あるいは永遠に訪れないというジレンマであり、批判である（Ibid、103）。著者は軍縮や軍備管理に関する議論を「戦争との関係を検討」するためのものとして位置づけており（Ibid、v）、これより核軍縮プロセスの議論を通じて、平和学における重要な考え方の一つである「プロセス・ユートピア」に対する批判的検討を効果的に提示したものと理解できよう。

著者のこうした視角から想起されるのは、平和学の権威であるアナトール・ラパポートの指摘である（ラパポート 1969、151）<sup>1</sup>。彼によれば、平和研究の一部は「『戦争の原因』がとり出せうるかどうかを突きとめることに向けられて」おり、「戦争の勃発を多かれ少なかれありそうにし、戦争を多かれ少なかれ苛酷なものにする傾向があり、平和の再確立を容易にしたり妨げたりするような、潜在的な敵国間における諸条件がとりだせうるかどうかを突き止めることに向けられている」と指摘する。上述したように、内容が広範に及ぶ平和研究にあって、彼が特に「戦争の原因」に注目している点は、戦争と武力紛争に焦点をあてた著者の議論との連関を示唆するものである。

## 1. アナーキー下の国際社会における国家間協力の困難と可能性

著者は、「アナーキー」について「協力や平和の状況（の利益）を保証する中央政府あるいは中心権威（central authority）の不在」と定義する（Ibid、138）。概してリアリストの立場からすれば、国際体系のアナーキー構造がもたらすものとして、国際関係では相互主義が欠如すると考えられる（土山 2004、44）。著者は、「囚人のジレンマ」ゲームを用いつつ、そのロジックに依拠した場合には主権国家間の協力が国際関係においてはありえないことをモデルとともに説

---

<sup>1</sup>A. ラパポート著（関寛治編訳）『現代の戦争と平和の理論』岩波書店、1969年、151頁。また、著者の視角と関連する議論として、次のような指摘もある。「平和研究からうることの期待できる知識（例えば、戦争を促進したり阻んだりする条件に関する知識）があっても、戦争を根絶するという問題に直接適用することは不可能であろう」と言いつつも、「しかしながら、こういった限界があるにしても、戦争の根源に関する知識は、もしそれが広く伝播するならば、長期的に重要な効果を及ぼすようになるであろう」。同、15-16頁。

明する (Matsuo 2005、144-145)。

ゲームの理論を用いて平和学を議論する妥当性については、再びラパポートの指摘が参考となる。つまり、彼は「戦争は戦略的な考慮にしたがってはじめられ、おこなわれる。そして戦略的な考慮のあるものは合理的でありうるし、他のものは合理的ではない。それ故に、戦争を推進したり防止したりする条件を理解するために、『合理的で戦略的な考慮を』を支配している原理をしらべることは啓発的である。これらはまた、非合理的で戦略的な考慮と、あるいは更に一般的に戦略の動力学での非合理的要因を支配している原理とに光を投げることができる。それ故に、ゲームの理論は平和研究に妥当しているのである」という (ラパポート Ibid、45)。つまり、ゲームの理論による戦争の性格を踏まえた分析が「啓発的」であり、しかも戦争の非合理的な戦略や要因に対しても柔軟性や応用可能性があるから妥当であるというものであろう。これに加え、著者の指摘するように、ゲームの理論によって、合理的選択から非合理的な選択結果へのロジックや道筋が明らかとなり、それを把握する重要性を考慮すると、ゲームの理論を用いた議論の妥当性は一層理解できる (Matsuo 2005、145)。

ゲームの理論の代表的なものとして「囚人のジレンマ」がある。囚人のジレンマとは、協力によってアクター相互の利得のチャンスはあるにもかかわらず、アクターは合理的な選択のために損失をしてしまうというものであり、また個々のアクターの合理的な選択が個々のアクターにとってもアクター全体にとっても合理的な結果を保証するものではないというものであった。つまり、囚人のジレンマのロジックによれば、国家の合理的選択がその国家にとっても国際社会全体にとっても利益 (国益) を最大化させるような保証などありえないということである。加えて、それに長期的安定をも備わった国家間協力の在り方とは、さらに実現可能性の低いものに他ならない。一方で、そのような協力の在り方を見つけることは、「平和学や国際関係研究において非常に重要」(Ibid、156) であり、「平和学や国際関係研究が達成しようと努力をしてきたこと」という見方もされる (Ibid、148)。以上のような重要性を考慮して、以下では、本書の特に第7章「国際社会における対立と協力」に焦点をあて、アナーキー下の国家間協力の困難と可能性に関する著者の議論を整理し、その要点を検討していく。

著者は米ソの軍備競争（「軍縮」か「軍備競争」か）や環境協力（「CO2削減」か「ただ乗り」か）を題材として囚人のジレンマを用い、個々の合理的選択の結果が個々にも全体にも合理的な結果を保証しないこと（つまり個々の合理的選択の結果、「軍備競争」や「ただ乗り」に至ること）を確認する（Ibid、146-148）。このような結果から明らかになるのは、個々の選択は合理的であっても、結果的には協力（つまり「軍縮」や「CO2削減」）の達成は困難ということである。その上で、著者は囚人のジレンマ状況においては、どんな協力の可能性があるのかを問う（Ibid、148、156）。しかしこの問いにこたえるためには、囚人のジレンマを解決し、囚人のジレンマの下での協力の在り方を示さなければならない。つまり、囚人のジレンマを解決することとは、個々の合理的な選択が集団の合理性も保証する方法を見つけることである。ここで、著者は次の二点に注意する（Ibid、156）。つまり、一つはある種の国際的な制度によりジレンマを解決することは考えない点である。というのも、そのような制度を用いた国際的な解決は個々のアクターの合理的な選択を制限するという問題をともなうからである。第二に、以下で取り上げる解とは、それがアクターにとっての合理性の要件をあきらめないという意味で制度的な解決策とはかなり異なっていることである。その上で、問いに対する答えとは次の3つの条件を満足させる解であると指摘する（Ibid、158）。すなわち、第一に、アクターそれぞれがその利益を最大化することができるという条件である。第二に、アクター全体にとって最大の利益を生み出すものであるという条件である。第三に、安定しているという条件である。つまり、「安定」とは、何回行っても（in many rounds of the game）常に選択されるものであることを意味する。ここで著者は、囚人のジレンマの一般化したモデルを基に、繰り返し型の囚人のジレンマ（an infinitely repeated prisoner's dilemma）を用いつつ、問いの答えが「おうむ返し」（Tit for Tat）という戦略にあることを計算とともに実証説明する（Ibid、158-161）<sup>2</sup>。「おうむ返し」とは、「最初の回は協調する。その後は前の回に相

---

<sup>2</sup> Tit for Tatの訳語で、通例は「しっぺ返し」という用語が用いられる。例えば、R. アクセルロッド著（松田裕之訳）『つきあい方の科学』ミネルヴァ書房、1998年。しかし、裏切りには裏切りということだけでなく、協調には協調で応じるということでもあるので、むしろ相手と同じことをする（しかもどちらかと言えば機械的に）という意味では、「おうむ返し」のほうが適切と判断した。「おうむ返し」という訳語を用いた文献として、ウ

手がとった手をまねる」という戦略であり、これこそ個々の合理的選択が個々にとっても全体にとって合理的な結果をもたらし、しかも安定している戦略である (Ibid)。囚人のジレンマの状況において国家間の協力は実現不可能であったが、しかし繰り返し型の囚人のジレンマの状況においては、条件によっては「おうむ返し」という戦略によって協力はありうるのである<sup>3</sup>。これらの理論を実際の現実にも照らした結果、著者は「しかし現実には、特に安全保障や軍事問題において、協調による長期的な獲得が裏切りによる短期的な獲得よりも大きいことを、自らに、そして他者に納得させることが常に可能とは限らない」と見ている (Ibid、162)。他方で、『『おうむ返し』戦略が常に協力で始まるという事実を見ると、一方的な軍縮 (unilateral disarmament) は、それが次の協力への道を開拓しうるという理由で、効果的なイニシアティブであると言うこともできよう」と指摘する (Ibid)。坂本義和は、1988年の著書の中で、『『一方的なイニシアティブ』と呼ばれる[軍縮]行動の合理性と現実性が、多くの人々に認められるようになって」おり、これが「最も合理的な選択」という評価を示している (坂本 1988、66-67)。これは、著者がゲームの理論を用いて導き出した見方を支持するものに他ならない。このようにして、アナーキー下の国際社会における国家間協力に関して、著者はゲームの理論を用いて、それが理論的に言えば困難であることを示し、また「一方的な軍縮 (unilateral disarmament)」という具体的なイニシアティブも導き出した。このイニシアティブを支持する見方もあり、著者によるゲームの理論を通じた成果は、現実の国家間協力に対して有効でありうることを示したとも言える。

## 2. アナーキー状況の国内における紛争集団間の協力の困難と可能性

国家間の協力が困難であると考えられるにしろ、あるいは可能であると考えられるにしろ、これらは国際社会の「アナーキー」という前提の上で検討されるもので

---

イリアム・パウンドストーン著 (松浦俊輔訳) 『囚人のジレンマ—フォン・ノイマンとゲームの理論』青土社、1995年。

<sup>3</sup> もっとも、「おうむ返し」にも弱点や問題点はある、それは著者も指摘している (Matsuo, *Ibid*, p167)。

ある。アナキーには二つの意味があり<sup>4</sup>、一つは前述したように中央政府不在の状態である（土山 Ibid、44）。政治学上は、しばしばこの意味で用いられる。他の一つとして、混沌（chaos）、無秩序（disorder）の意味もあり、こちらは日常的に用いられることが少なくなく、政治学でもその区別が截然となされているわけではない。この「アナキー」に関して、国際社会の特性としてではなく、国内の文脈で議論される場合もある。例えば、内戦状況にある一部の紛争国における実態としての「アナキー」である。

例えば、ハートゼルとホディのように、国際システムを定義づけるアナキーと、内戦国の中心権威（central authority）の不在との間には明快な共通点（clear parallel）を見出す議論もある（Hartzell and Hoddie 2006、161）。彼らによれば、いかなる国家も国際システム全体のルールを作成、執行することができないように、紛争国（conflict-prone countries）の政府の中には法の支配を執行できない、国内の治安を保証することができない例もあり、従って一部の内戦国における中央政府の不在状態は、統治の役割を果たす中央政府が実態として存在していないという点で、国際システムにおける中央政府の不在という特性と共通するところがあるという。

このような一部の内戦国における中央政府不在の実態について、例えば「破綻国家」はその典型例として指摘できよう。「破綻国家」とは、中央政府の果たすべき最低限の機能すら遂行されていない国家である。「破綻国家」に関して、星野は「以前の統治機構が崩壊した後、誰がいかなる権限でどのような統治をすべきかを自己決定できないほどに混乱した状況」にあるような国家であり、またそれを「『セルフ』の不在」として説明した（星野 2004、328）。つまり、国家の再建から考えた場合、それは本来、つとめて「国内的な」課題であり、その原則はあくまでも「セルフ・ガバナンス（自己統治）」のはずであり、また国際社会の支援も間接的なものが中心的になるのがこれまで一般的であったにもかかわらず、「破綻国家」にあっては、そもそもその「セルフ」が確認できない状況にあるのである。

---

<sup>4</sup> 土山、前掲書、44頁。中央政府不在の状態としての「アナキー」は、そもそもan-archy、すなわち君主や支配者の不在という意味であり、国内社会では、ホッブズがいうリヴァイヤサンの生まれる以前の自然状態、つまり国家不在（statelessness）のことを意味する。

したがって、内戦国の文脈でのアナキーとは、内戦によって国内の混乱が収拾できないほどに悪化しており、統治の役割を果たす中央政府も機能不全に陥っており、これより中央政府が実態として存在しない、あるいは確認できない状態を意味するものと言えよう。このとき、内戦による政治的、経済的、社会的な混沌や無秩序ゆえに中央政府の機能不全が生じ、実態として中央政府不在の状態に至ったのか、あるいは中央政府が事実上機能しておらず混沌や無秩序に陥っているのか、あるいは両者の相互作用が生じているのかは、具体的な事例を通じた検証による判断が必要である<sup>5</sup>。いずれにしろ、内戦の文脈で国内が無政府状態にあるソマリアのような国家は、その検証対象の一つに含まれよう。

中央政府が機能不全に陥っており、実態として中央政府不在状態となると、そこでは国際政治で想定されているような安全保障のジレンマが発生している場合もある<sup>6</sup>。つまり、自らの安全（security）に対する脅威を感じると紛争当事者は武器の獲得を含む様々な自助措置（self-help measures）を用いざるを得ないと考えるようになり、そのような紛争当事者の選択が結局は軍備競争を助長し紛争の危険を高める効果を持つのである（Hartzell and Hoddie 2006、155-156）。これは、前述したように「囚人のジレンマ」を使った米ソ間の軍備競争と同じ現象である。つまり、個々の選択は合理的であっても、結果的には裏切り（つまり「軍備競争」）となり、協力（つまり「軍縮」）の達成が困難になってしまうのである。安全保障のジレンマの発生については、例えば「鹿狩り」ゲーム<sup>7</sup>からも説明することもできる。というのも、鹿狩りゲームは、実際

---

<sup>5</sup> ザートマン（I. W. Zartman）は、内戦が膠着すると、政府も反政府各勢力も実効支配を拡大する努力を事実上放棄するという。また反政府勢力の指導者にとっては、戦争が終われば自らの勢力における権力を失う危険性があることから、戦争の継続自体が利益となり、一方で現地の人々は生存のために中央政府ではなく、生存の糧のあるところに依存するようになり、多くは地方的な狭い伝統的生活圏に回帰し、政治、経済は局地化することとなり、この結果として、政府の政策決定、執行、強制の制度が機能しないということと社会的統一の破壊とは表裏一体をなしていると指摘する。 I. W. Zartman. 'Introduction,' Zartman, ed., *Collapsed States*, Lynne Rienner, 1995, pp.5-6

<sup>6</sup> ポーゼンは、旧ユーゴスラビア解体後のセルビア人とクロアチア人の対立を例に、エスニック集団間の安全保障のジレンマが発生したことを指摘している。 Posen, Barry R. 'The Security Dilemma and Ethnic Conflict,' *Survival*, vol.35, no.1 Spring 1993, pp.43-44.

<sup>7</sup> この名前は、スイス生まれの哲学者、ジャン＝ジャック・ルソーの著書『人間不平等起



の軍備競争の厳密な表現 (the accurate representation of actual arms race) との見方もあり、特に軍備競争における誤解や相互信頼の問題を説明するためにしばしば使われるものだからである (Matsuo 2005、151)。

鹿狩りゲームが想定する状況は次のようなものである。すなわち、コミュニケーションがとれない状況にいる二人のハンターがいるとする。各ハンターは、協力して鹿を捕まえるか、あるいは裏切って一人でウサギを追うかを選択することができる。ただし、ここで重要なのは、一人の力では鹿をしとめることはできないが、ウサギなら一人でとらえることができる。誰しもウサギより鹿が欲しいのだが、収獲ゼロよりもウサギの収獲があったほうが望ましい。一方で、相手がウサギを追いかけることを選択するとすれば、鹿狩りはできなくなってしまう。このような鹿狩りゲームの利得表を適当な数値で表すと、次のようになる。

鹿狩りゲーム

		B	
		鹿を狩る (協調)	ウサギを追う (裏切り)
A	鹿を狩る (協調)	3, 3	0, 2
	ウサギを追う (裏切り)	2, 0	1, 1

たとえば、Bが「鹿を狩る」(つまりAと協調する)とAが考えるならば、Aにとっては「ウサギを追う」(つまりBを裏切る)ことによって得られる利得2よりも、「鹿を狩る」(つまりBと協調する)ことによって得られる利得3のほうが大きく、Aにとって合理的な選択とは「鹿を狩る」(つまりBと協調する)ことである。逆に、Bが「ウサギを追う」(つまりAを裏切る)とAが考えるならば、Aにとっては「鹿を狩る」(つまりBと協調する)ことによって得られる利得0よりも、「ウサギを追う」(つまりBを裏切る)ことによって得られる利得1のほうが大きく、Aにとって合理的な選択とは「ウサギを追う」(つまりBを裏切る)ことである。これらはAの立場からの説明であるが、鹿狩りゲームとは両

---

源論』における「鹿と兎」の話に由来する。ルソー (本田喜代治・平岡昇訳)『人間不平等起源論』岩波文庫、2000年、89頁。

方のプレイヤーが選択する利得の順序が一致するような対称的なゲームであることから、Bの立場でもその利得の順序は同じである。AもBも、「鹿を狩る」ために自分の持ち場を守ると相手から信頼されているとすれば、自分の持ち場を守っておくことが合理的であり、逆に相手からそのように信頼されず、傍を走っているウサギを見れば自分がウサギを追うだろうと考えられていると判断すれば、自分にとっては「ウサギを追う」ことが合理的であるというものである。こうして、鹿狩りゲームの合理的選択とは、結局は一方が他方に抱く信頼次第とすることができる。。

武装解除においては、(元) 戦闘員や他の武器保有者が保有武器の提出に応じない場合が少なくない。この場合の安全保障のジレンマとは、前述したハートゼルとホディの説明を借用すれば、自らの安全 (security) に対する脅威を感じると紛争当事者は武器の保持を含む様々な自助措置 (self-help measures) を用いざるを得ないと考えようになり、そのような紛争当事者の選択が結局は武器が削減されず不法な循環が続き、紛争再発や犯罪の増加の危険を高める効果を持つこととして説明できよう。

これは、紛争当事者が紛争再発に備えるため、あるいは彼らを含む現地の武器保有者が不安定な治安に備えるためなどが原因とされる<sup>8</sup>。つまり、相手が攻撃を再開する意図がないことや紛争再発の可能性がないことについて確信できない中では、加えて治安の安定を担当する警察などの法執行機関が機能していない中では、自らに及びうる脅威に備えるための自衛手段の一つとして、その武器を保有し続けようとするのである。武装解除において、紛争当事者間の信頼醸成や、政府や警察に対する現地住民の信頼確保がたびたび指摘され、重視されるのはこのためである<sup>9</sup>。つまり鹿狩りゲームの合理的選択が他者への信頼

---

<sup>8</sup> 武装解除に応じない他の原因としては、経済的利益の手段として武器を手放せないことが挙げられよう。生計手段が確保できないなど自らの経済的な見通しがつかない中で、とりあえずの収入を手にするために武器を用いた強盗を行い、結果的に社会全体においてそのような武器犯罪が多発する例も少なくない。つまり、紛争後社会においては、治安を担当する政府や警察への能力に期待がもてず、また相手の紛争当事者が紛争を再発させる意図や、また隣人が武器を用いて自らを強盗の対象とする意図について不安が残り、これが武装解除や武器回収を停滞させる原因の一つとされる。

<sup>9</sup> 例えば、A project of the Graduate Institute of International Studies. *Small Arms Survey 2002*, Oxford University Press, p304; *Small Arms Survey 2003*, p301.; Jeong, Ho-Won. *Peacebuilding in Postconflict Societies: Strategy and Process*, Lynne Rienner

次第であるように、武器保有者の合理的選択も相手の紛争当事者への信頼次第と言える状況があるのである。つまり、「鹿を狩る：協調」か「ウサギを追う：裏切り」かという選択も、「武器を提出する：協調」か「武器を保持する：裏切り」かという選択も、ともに相手に対する信頼がその決定に大きな意味をもつと考えられる。また、囚人のジレンマとは異なり、鹿狩りゲームは双方が協調した時の一方の利得3が、一方のみの協調のときの利得2よりも大きく、これは双方による協力のみが、全紛争当事者にとっても、紛争当事者それぞれにとっても最大の利益となることを意味している。

## おわりに

アナーキー下の国際社会における国家間協力に関して、著者はゲームの理論を用いて、それが理論的に言えば困難であることを示し、また「一方的な軍縮 (unilateral disarmament)」という具体的なイニシアティブも導き出した。このイニシアティブを支持する見方もあり、ゲームの理論を通じた成果は、現実の国家間協力に対して確かに有効でありうることを示したとも言える。

他方で、アナーキーは国内の文脈でも議論される場合があり、これが意味するのは内戦によって国内の混乱が収拾できないほどに悪化しており、統治の役割を果たす中央政府も機能不全に陥っており、これより中央政府が実態として存在しない、あるいは確認できない状態であった。その際、「鹿狩り」ゲームを参考にしつつ特に武装解除に注目した場合、そこでの紛争当事者間の協力の可能性は、信頼によるところが大きいことを確認した。ゲームの理論を用いた議論は、平和構築の議論の発展可能性を示唆していると言えよう。

---

Publishers, 2005, pp.39-41.; Spear, Joanna. 'From Political Economies of War to Political Economies of Peace: The Contribution of DDR after Wars of Predation,' In *Contemporary Security Policy*, Vol.27, No.1 (April 2006), p173.; Spears, Ian. *Confidence Building Measures in Africa*, International Security Research and Outreach Programme, International Security Bureau, March 2003, pp.31-33.; Gleichmann, Colin, Michael Odenwald, Kees Steenken, and Adrian Wilkinson. *Disarmament, Demobilization and Reintegration: A Practical Field Guide*, 2004, pp.17-62.など。

## 参考文献

- A. ラパポート著（関寛治編訳）『現代の戦争と平和の理論』岩波書店、1969年。
- 土山實男『安全保障の国際政治学—焦りと傲り』有斐閣、2004年。
- 坂本義和『新版 軍縮の政治学』岩波新書、1988年。
- ルソー（本田喜代治・平岡昇訳）『人間不平等起源論』岩波文庫、2000年。
- Posen, Barry R. 'The Security Dilemma and Ethnic Conflict,' *Survival*, vol.35, no.1 Spring 1993.
- I. W. Zartman. 'Introduction,' Zartman, ed., *Collapsed States*, Lynne Rienner, 1995.
- Hartzell, Caroline and Matthew Hoddie. 'From Anarchy to Security: Comparing Theoretical Approaches to the Process of Disarmament Following Civil War,' In *Contemporary Security Policy*, Vol.27.No.1 (April 2006).
- 星野俊也「平和構築とDDR」、黒澤満編「大量破壊兵器の軍縮論」信山社、2004年。
- R. アクセルロッド著（松田裕之訳）『つきあい方の科学』ミネルヴァ書房、1998年。
- ウィリアム・パウンドストーン著（松浦俊輔訳）『囚人のジレンマ—フォン・ノイマンとゲームの理論』青土社、1995年。